

「災害のあと 震災のまえ」
その 2

當眞嗣朗

「災害のあと 震災のまえ」

その2

ふたりは礼を言って、その家を後にした。振り返ると夜は

ますます深まっていて、空を黒い雨雲が覆いはじめていた。

やがてその向こう側に月が消えると、あたりは濃厚な闇を纏いはじめた。どこかで名前の知れない小動物が鳴いている。災害後、鳥の類いはほとんど見なくなつた。近隣の住宅から、かすかにラジオ放送の音声が洩れている。しかしガバメントが一方的に発する言葉は、ふたりにはまったく理解できない異世界の言語だった。ふたりは住宅が建ち並ぶ通りを歩いて、つぎの配達先へと向かつた。

「あの話、どう思う?」。ツネコ姉さんがノボルに訊いた。

その口調は平坦なものだったが、その奥には不安を起点とする棘が垣間見えた。絶対的な自信を持ち、人一倍の努力家である彼女が、弟に意見をもとめることは稀だ。それは彼女が、正体不明のガバメントを怖れていることの証しかもしれない、とノボルは思った。そのガバメントのお菓子を食べな

がら、それでもこんなにおいしいお菓子を作ることのできるガバメントなら、そう悪いところではないのかかもしれない、と考えた。しかし、とりあえず、「判らない」と、一言だけ答えた。

「俺は不安なんだよ」。ツネコ姉さんが歩みを若干緩めて言った。彼女が発する一言ひとことは、目の前の不安を正確に狙い撃ちしていた。「この海の向こう側に理想郷なんてものがあるなんて初めて聞いたが、もしも、もしもだよ、そんな理想郷が実際にどこかに存在するとして、果たしてガバメントの考える理想ってなんなのだろうか? 飢えや争いがないということだろうか? 俺は人類がこれから歩んでいくべき理想の世界というものを時折考えるんだが、想像する世界はいつも宗教的な集団の形を取るんだよ。そこではすべての争い事がなくなり、人々は平穏に満ちた暮らしを営んでいる。エネルギーは再生可能な自然エネルギーを使い、食料は自給自足でまかなつている。それは一見、理想の世界のよう見える。しかし、俺はどうしても納得することができない

んだよ。争いの生じない世界というのは、人類がひとつの中の命体となつたようなものだらう？ すべての人間が互いに分かり合える世界というのは素晴らしい。たしかにそう思う。

しかし人類は、かつて精神的に統一されたひとつの集團に過ぎなかつたとされる。そこに自己を発見して以来、發展を遂げてきたんだ。つまり、様々な異物を内包した世界というのは、人類が獲得した進化の恩恵だと言えるんだ。それが人間の世界なんだよ。だから、飢えや争いがない理想の世界というのは、実際には恐ろしい世界なんじゃないかと俺は思うんだ

は口中に残る菓子の甘さを存分に味わいながら、纏まりのない自分の意思を統一すべく意見を言った。

「どうしてガバメントは、そんな噂を流すのかな？ 確かに災害の後、ぼくたちは地獄みたいな世界に生きている。災害後生まれのぼくにとっては、これが当たり前なんだけど、それでも随分、変な世界だとは思うんだ。とにかく貧しい世界だよね。後、十年もすれば、誰も疑問に思わなくなるよ。もし本当に理想郷なんてものがあるとすれば、そこに住みたいと考えるのは当然の感情だろうと思う。誰だって苦しんで生きていたくないわけだから」

姉の話に黙つて耳を傾けながら、お菓子の最後の一欠けらを食べてしまふと、ノボルは指先についた糖蜜を舌で丁寧に舐め取つた。その話は彼にとって複雑に思われた。幾多の情報がそれぞれに絡まりあって、すんなりと脳に定着しないのだ。しかし常日頃、難解な書物を浴びるほど読み込んでいる姉は弟の気持ちなど構わず、子供の理解には及ばない話をする。それが学校の代わりなんだよ、と彼女は言う。ノボル

「それはおそらく」と、ツネコ姉さんが間を置かずに答えを返した。

「人々の目を別つなにかに向けさせるためじゃないだろうか？」俺はそう考える。ガバメントはこの世界の統治者だ。まだ完全ではないにせよ、彼らの試みは成功しているように思える。統治する側にとってみれば、統治される側は無知でいてもらつたほうがいい。そしてなるべく不満を抱かせない

ようにしたほうがいい。だから彼らは理想郷の話を持ち出す。

海の向こう側にそんな夢の世界があつて、いざれそこへ行けるのだとすれば、人々の不満は随分、やわらぐはずだ。だからガバメントは噂を流布させる。しかしその裏側を見つめなければ駄目だ。人間の理想を維持するには、多くの犠牲を払わなければならない。旧世界はまさにそれで成り立っていたんだ。一部の地域の平和を維持するために、別の地域に軍事力の負担をさせる。それはエネルギーに関してもそうだった。

それらの犠牲はかならずどこかで悲劇をつくるんだよ。天国をつくるためには、同じ世界に地獄をつくるってことだ。それこそ俺たち人類が災害から学んだことのひとつのはずだがな」

その後、ふたりは三軒の取引先を訪ねた。飴を定期的に購入する人間は大抵、自分なりの意見を持ち合わせたタイプで、その多くは近隣の住民との交流に積極的ではない人間たちだった。彼らは同じ住宅地に住んでいても互いに友好関係ではなく、他の多くの人々と違つて群れをつくることを極度な

までに嫌い、孤独であることを好む傾向にあった。これが飴の作用だろうか？ ノボルは疑問を抱えて、姉に問い合わせた。しかし彼女の返答は、それを否定するものだつた。

「飴にそんな作用はない。もちろん特殊な効能はあるけど、それ以上のものではないんだよ。もちろん作り方には特徴がある。材料も特殊なものを使う。しかし飴は飴だ。ただ舐めてクチのなかで溶けて消えるだけだ」

その返答はノボルに不満を抱かせた。ひょっとすると姉は、ぼくに何かを隠そうとしているのかもしれない。そう考えて、飴作りに関わる一切がノボルには秘密とされていることを思い出した。いざれ身体が大きくなつて、無菌服が着られるようになつたら、飴作りのイロハを教えてやる。彼女はそう約束していた。ノボルはその時が訪れるのを心待ちにしていた。飴に関するすべてを知るとき、その時は自分がツネコ姉さんと対等の関係になつた時なのだ。そう考えて、彼は口元に温かい笑みを浮かべた。その時、弟は姉に言うつもりだった。愛している、と。しかしその日は、未だ、遠い。

災害の直後、大量の瓦礫が散乱する東北の医療施設で、ノボルは産まれた。出産後、母親は息絶えたという。数日後、その噂を聞きつけたツネコ姉さんが沖縄からやつってきた。そして彼を引き取ったのだ。その当時の記憶は、もちろん本人にはない。最初の記憶は、自宅のベビーベッドに仰向けに寝かされて、寂しくて泣いている光景だ。すると姉がやつてきて彼をやさしく抱きあげ、こう言つたのだ。「お前は【餡売り】になるんだぞ。だから強くなきゃいけない」。

その日、最後に訪問した配達先で、ある噂を耳にした。その家の主人は図書館の職員で、温厚な性格の男だった。彼は先日、知人からある情報を入手して衝撃を受けたという。その話を聞いたツネコ姉さんの表情が強張った。その様子は顔面の神経が麻痺した神經質の看護婦みたいだった。過労と心労が、その身体を一斉に攻撃したという感じだ。

「偽者の餟？」と、姉が言つた。緊張に強張つた口調だった。

「そうです」。家の主人は言つた。「南の街からやつてきた男が言つていたんですが、どうやら偽者の餟が出回つているら

ボルは産まれた。出産後、母親は息絶えたという。数日後、その噂を聞きつけたツネコ姉さんが沖縄からやつってきた。そして彼を引き取ったのだ。その当時の記憶は、もちろん本人にはない。最初の記憶は、自宅のベビーベッドに仰向けに寝かされて、寂しくて泣いている光景だ。すると姉がやつてきて彼をやさしく抱きあげ、こう言つたのだ。「お前は【餡売り】になるんだぞ。だから強くなきゃいけない」。

「効能のほうはどうなんだ？」

「それが、その偽者の餟を舐めたヒトのなかには身体の不調を訴えるヒトが続出しているらしくて、なんでも脳に悪い影響を及ぼすらしいのです。それで、先日、蔵書整理の際に発見した本を思い出したのです。餟を製造する技術は旧世界の末に確立されていたのはご存知でしょう？　その時、餟は何の変哲もない普通の食品でした。しかしある食品会社が起こした事件をきっかけに、餟の規制がはじまるのです」

その話はノボルの胸を不快な感情で満たした。災害後の世界において餟は、人々の生活に欠くことのできない必需品だ。販売されている。消費者は懇意にしている業者（【餡売り】）から餟を定期的に購入し、摂取する。だからその流通ルートと舐める餟の種類は消費者毎に異なる。とはいっても多くの人

しいんです。見た目も味も本物の餟と変わりないらしくて。でも本物の餟にくらべると随分、値段が安いらしいのです。闇の餟とも違う」

「効能のほうはどうなんだ？」

「それが、その偽者の餟を舐めたヒトのなかには身体の不調

を訴えるヒトが続出しているらしくて、なんでも脳に悪い影

響を及ぼすらしいのです。それで、先日、蔵書整理の際に発

見した本を思い出したのです。餟を製造する技術は旧世界の

末に確立されていたのはご存知でしょう？　その時、餟は何

の変哲もない普通の食品でした。しかしある食品会社が起

した事件をきっかけに、餟の規制がはじまるのです」

間が餌に依存して生きているという点では共通している。何故なら餌は、忘却を促す作用を持つからだ。人々は過去の辛い記憶を忘却することで未来に希望を抱き、この暗澹とした世界を辛うじて生きしていくことが出来るのだ。その貴重品に偽者が巡回するなんて信じられない。ノボルは胸の内で嘆いた。

それに旧世界の末に起きたという食品会社の事件の話は、彼の胃を重くさせた。まるで熱く焼けた鋼鉄製の鈍器を呑み込んだようだつた。

「まるで世界が崩壊していくようだ。そう思いませんか？」

その家の主人は陰鬱な表情で言つた。

「その足音は日毎に大きくなっているんです。いずれそれは、我々の目の前にあらわれる日がやつてくるのでしょうかね。もし震災がやつてきたら、本当に大変なことになる」

「次の家が今日、最後の配達先だ」。ツネコ姉さんが幾分くたびれた口調で言つた。先ほどの配達先で耳にした噂話の件が、彼女を深く動搖させている様子だった。ノボルは知つていた。姉の身体が女性らしさを喪失した原因は、旧世界で起

きた食品事件が関係しているのだ。もちろん彼女自身がその話を他人に吹聴することはない。彼は自宅にある本を読んで学んだのだ。その事件と姉の身体との間には確かな因果関係が存在する、と。

「その家はこの住宅地の外れの海岸沿いにある。お前はまだ一度も行ったことがなかつたな。そこに住んでいるのは偉い学者だ」

ツネコ姉さんが説明した。

「ガクシャ？」と、ノボルは言つて小首を傾げた。それは本のなかに登場する偉いヒトの肩書きだつた。それが知識層と呼ばれる種類の人間であることは彼にも判つた。しかし実際に面識を持つたことはなかつた。だからその姿を、具体的に思ひ浮かべることができなかつた。それは学校の先生の仲間だろうか？ 彼はそう考えて、公的教育機関に属さない自分が、教師について充分な知識を持ち合わせていないことに気付いた。その家は学校の一種なのか、と彼は傍らを往く姉に訊いた。

「否、違う。学校ではない。ただの民家だ。学者の住む家だ。

とは言つても、誰かになにかを教えているわけじやない。災害の前は大学で教鞭をとつていたらしいけれど、今は教授じゃない」

教授っていうのは、大学の先生のことだ、と姉は弟に簡単に説明した。

「専門に学んでいるのは文学だ。そして俺たちより物知りだ」

「姉さんよりも?」。ノボルが意表を突かれて目を細めた。自分の姉以上の物知りを知らなかつたからだ。

「そうだ。学者は姉さんより、いろんなことを知つてゐる。でも彼に言わせれば、世の中は理解できないことが多いそうなんだが。災害の後、ガバメントがあらわれたのも、そのひとつだと言つていた」

強な男の腕ほどもある太い根を持ち、それが大蛇のようにうねりながら地面を這い、地面の内部へ、深く、潜り込んでいた。枝はそれ自体が意思を持つてゐるかのよう、それぞれ異なる方向へと伸び、そこで無数の葉を茂らせ、または髭のような根を地面へとむかって垂らしていた。それらは空を塞ぐ天蓋の役割を果たし、そこを通過する者の視界から夜空を遠ざけていた。月の明かりは遙か彼方にあり、地面には到達することがほぼできない。かつては木の精が住むと言われた樹木だが、今では誰もそんな話を信じようとはしない。しかし薄気味の悪い環境のせいで、そこには普段、ヒトが滅多に近寄らない。危険な場所だ。

その家へと辿り着くには一苦労の手間が必要だつた。住宅地から外れた場所にある樹木の密生する丘を越さなければいけなかつたからだ。そこはモクマオウと呼ばれる亜熱帯性の巨大な樹木が無数に生い茂つていた。樹齢の長いそれは屈

その気配を逸早く察したのはツネコ姉さんだつた。誰かの視線を感じる、と彼女は用心深い聲音で囁くように呟いた。そして警戒心を剥き出しにしながら素早く周囲の様子を窺い、胸騒ぎの正体を確かめようとしていた。しかしその緊張した眼差しが捉えるものは、深い闇に溶け込むようにしてそびえたつ無数の樹木以外にはないようだつた。それでも一帯

を覆つた空気は緊張感を混ぜ込んで極度に張り詰めていた。

【飴泥棒】だろうか？ノボルは、まずそれを疑つた。この家業にその危険は常に付きまとつた。不安を募らせた彼は、姉の傍に寄つた。そしてその頑丈な手を握つた。

正体不明の何者かは樹木の陰に身を潜めて、【飴売り】が罠にかかるのをじっと待つてゐるやうだつた。ある一瞬が訪れれば、彼らは一斉に襲撃を開始するのだろう。一人じやない、しかし正確な数を特定することは難しいな、ここは闇が深過ぎる。ツネコ姉さんが言つた。気配から察して十数名、潜んでいるようだ、と。【飴泥棒】は単独では行動しない。常に群れをつくる。そのほうが効率的に狩りを行いやすいからだ。

「迂闊だった」。姉が苦々しく言葉を吐き捨てた。「おそらく俺たちが家を出た辺りからつけていたんだろう。この辺の【飴泥棒】は、俺たちの動向を常に注視しているからな。家は守りが堅い。防犯の設備は整つてゐる。侵入するのがまづ無理だと見て、こっちに来たんだ」

「どうするの？」ノボルが脅えた声をだした。「どうしよう

」という受動的な言葉でなく、「どうするの？」という能動的な言葉を自然に選んで使つた。何故なら、姉が【飴泥棒】に負けるはずがなかつたからだ。彼女には武術の心得があり、実戦経験も豊富なのだ。それにこちらには自動小銃だつてある。銃器は高価な道具で、購入には信用が必要になる。夜盗のような彼らには人手が困難な武器だ。だから彼らが銃器で武装しているとは考えにくい。もちろん闇のルートはある。しかしこれまでに【飴泥棒】が銃を使う現場に遭遇したことはない、とノボルは考えた。本質的に、彼らは臆病であり、凶暴性は薄いのだ。仮に襲撃を受けても、反撃することは充分に可能だ。

しかし彼は不安に包まれていた。ツネコ姉さんは自分を守つてくれるだろう。それは確実だ。それでも複数の人間に同時に襲撃された場合、自ずと自衛を迫られる。ノボルは【飴泥棒】と戦つた経験がなかつた。姉の話によれば、彼らは刃物を用いて、相手の戦力を削いでいく。その後で飴を強奪し、逃走するという。命までは取らないのが彼らのやり方だ、何

故なら【餡泥棒】は【餡売り】に依存して生きているからだ、と。それでも以前、【餡泥棒】と一戦を交えて腕に怪我を負った姉は、その傷が治癒するまで、仕事がままならない状態がつづいた。その傷口は深く、ノボルは思い出すだけで恐怖を感じた。

確かに防犯設備の整った自宅を襲うより、配達の最中を襲撃したほうが強奪は簡単だろう。ノボルはそう考えた。実際、【餡泥棒】の多くは【餡売り】の自宅を襲撃することが少ない。餡の製造現場を破壊しては、肝心の餡 자체を奪取できなくなるからだろう。彼らには餡作りに関するノウハウがなく、作るより奪うほうが話は早いのだ。稀にそのような事件が起きるのは、彼らが本当に切羽詰った状況に置かれた場合だ。だから彼らが後をつけてきたのは理解できる。自宅を出た直後を狙わなかったのも、人目を避けてのことだろう。災害後、闇が深まり、外出するヒトの数が減ったとはいえ、やはり住宅地は人目につきすぎるのだ。もしも誰かに見つかって、ガバメントに通報されたら厄介だ。彼らのような小規模の集団

は巨大権力を最も恐れる。だから襲撃は必ず人目につかない場所で行われる。

その彼らが襲い掛かつてきた場合、ツネコ姉さんは完璧に応戦してみせるだろう。彼女を武装解除するのは、いかに【餡泥棒】と言え困難だ。しかし自分は違う、とノボルは暗い面持ちで思考を巡らせた。ヤツラは確実に非力なほうに狙いを定めてくるだろう、と。そして自分を捕らえた後で、人質にして、ツネコ姉さんから餡を要求するのかもしれない。ヤツラのアジトに連れ去られ、監禁される可能性もある。そしてツネコ姉さんから餡を強請りつづけるのだ。ノボルはそう考えて、恐ろしくなった。

つづく